

田原の文化財ガイドⅢ

渥美半島の城館

joukan



渥美半島の

城館

joukan

CONTENTS

はじめに	2
戦国時代から江戸時代の田原の移り変わり	3
田原城	8
田原城のみどころ	10
城下町をめぐる	14
和名の城	16
コラム●地図に描かれた城	17
和地城跡	18
コラム●渥美半島の海運と海賊 -水軍たち-	19
コラム●戦争遺跡も城か?	20
陣屋と御殿跡	21
大垣新田藩陣屋	22
コラム●地名に残された城館	23
海防施設	24
日出砲台	26
海防にかかる資料	28
城館をめぐる	30
参考図書	32

はじめに

日本人は城が大好きです。歴史に興味がない人でも一度は城跡に行ったことがあると思います。日本には3~4万もの城があるといわれています。真っ先にみなさんが思い浮かべる城は、水をたたえた堀がめぐり、石垣、塀が積み重なるように見え、その上には天守がそびえ立つ。こんな城ではないでしょうか。その典型的なものは世界遺産にもなった姫路城かもしれません。このような城を見ると造形的な美しさ、それをなした技術の素晴らしさ、そしてそこに住んだ権力者への尊敬と憧れを感じます。しかし、私たちのまわりを見渡してもこんな城はそうそうありません。愛知県は有名な戦国武将を生み、また城が築かれています。その多くは戦国時代に土を掘り、積み上げて作られた城です。また、屋敷を土塁で囲った程度のももあります。江戸時代には、あらたな城を作ることを制限されたため、全国の「城」と呼ばれるものほとんどがこのような城なのです。

城は「広辞苑」には「敵を防ぐために築いた軍事的構造物」とわかりやすく記されています。軍事、すなわち人と人の生死をかけた争いの中で生まれ、発達を上げたものです。また、城は軍事的なものであるとともに、地域を治めるための中心的な施設、そしてその人たちの住居という役割もあります。

今回紹介するものは、地域の有力者が築いた中世の名もなき城、江戸時代の城、そして、陣屋、海防施設です。まとめて「城館」と呼んでおきます。みなさんのイメージするものとは遠いかもしれませんが、城の役割を大きくとらえてみました。

城を巡る歴史にはさまざまな夢やロマンがありますが、その一方で城は争いの果てに生まれ、この争いで多くの人の命が失われた、という事実も忘れてはいけません。そう考えると、城は「負の歴史」の証人でもあります。しかし、城と城とともに生まれた城下町はその地方の政治、経済、文化の中心です。たとえ派手な城ではなくてもそれは地域の歴史の歩みを知る大事な資料なのです。

さて、これらの「城」たちを知りふるさとの歴史に思いをはせましょう。

戦国時代から江戸時代の田原の移り変わり

日本の城は戦国時代に多く作られました。それは戦国時代に支配者の争いがひんぱんに起こり、支配者の移り変わったことが大きく関わっているからです。ここでは戦国時代以降の渥美半島の支配のようすを簡単に説明します。

古代には渥美半島は伊勢神宮領、国衙領(国の領地)、京都の寺領、公家領となっていました。1336年、南北朝の争いが起こります。このころ渥美半島は、京都の寺領や白河結城家が公領を、伊勢神宮の櫛直の系統の松垣家が伊良湖を中心に神宮領の管理をしていました。ともに南朝側にたっていたため、半島は南朝側の勢力圏でした。ここに北朝側の足利一門の一色氏が、渥美半島(和地・高松)に侵入し、南朝側の領地を奪い、やがて、半島は一色氏によって治められるようになりました。一色持範は応永(1394~1427)の末頃、渥美郡代となり田原町五軒町の一色屋敷に住んでいたといえます。その子一色七郎は跡をついで渥美郡代となり半島を治めていましたが、京都で応仁の乱(1467)が起こると、京都へ向かい西軍の山名宗全の軍に加わりました。文明9年(1477)、田原に帰ったものの、その間渥美郡は駿河の今川氏の勢力下に置かれ、渥美郡の支配を任かされた戸田氏(当時は豊橋市老津町に住居)が牛耳った状態でした。一色七郎は、時勢をさとり戸田氏と養子縁組し大草に隠居しました。そして文明12年(1480)頃戸田宗光は田原城を築城し、半島統一の足掛かりとしました。

この頃、半島の西は京都の烏丸家の領地となっており、烏丸資任は応仁の乱をのがれ、保美町に住んでいました。延徳年間(1489~1491)に戸田宗光は半島の西まで攻め入り半島全域を統一し、以後戸田氏は5代にわたり半島を治めました。全盛期の2代憲光の時代には、知多半島の南まで勢力を伸ばし三河湾を領有し、伊勢湾の海上交通にも大きな力を持ったと思われます。その後、天文16年9月に駿河の今川義元が、田原城攻めを行い今川氏の治めるところとなりました。さらに、田原城は徳川家康(当時松平)に攻められ、家康の領地となりました。

これらの、領主とは別に、古くから集落に住居した有力な土豪の存在も知られています。渥美半島では伊勢湾の海上交通に関わった船手が多く住居していました。畠村の間宮家と、伊良湖村の糟谷家、中山村の清水家は有力で、家康に仕え活躍しました。特に間宮家は家康の田原城攻めの時に活躍しています。

天正12年(1574)、徳川家康と豊臣秀吉(当時は羽柴)が争った小牧・長久手の戦いの時には、後に鳥羽藩主となる秀吉方の九鬼水軍によって、家康方の渥美半島の海岸の村々は焼き払われたといえます。この戦いの後、渥美半島は秀吉の領地となり、吉田城の池田照政(輝政のち姫路城主)の城代(家臣)が入ります。

江戸時代に入ると、田原城は田原藩主戸田家3代、三宅家12代が24か村を治めるところとなりました。しかし、半島の西は、鳥羽藩、大垣新田藩、日田藩(大分県日田市)、相良藩(静岡県牧之原市)、旗本領、幕府の直轄地、寺領など複雑に入り組んでいました。

※注

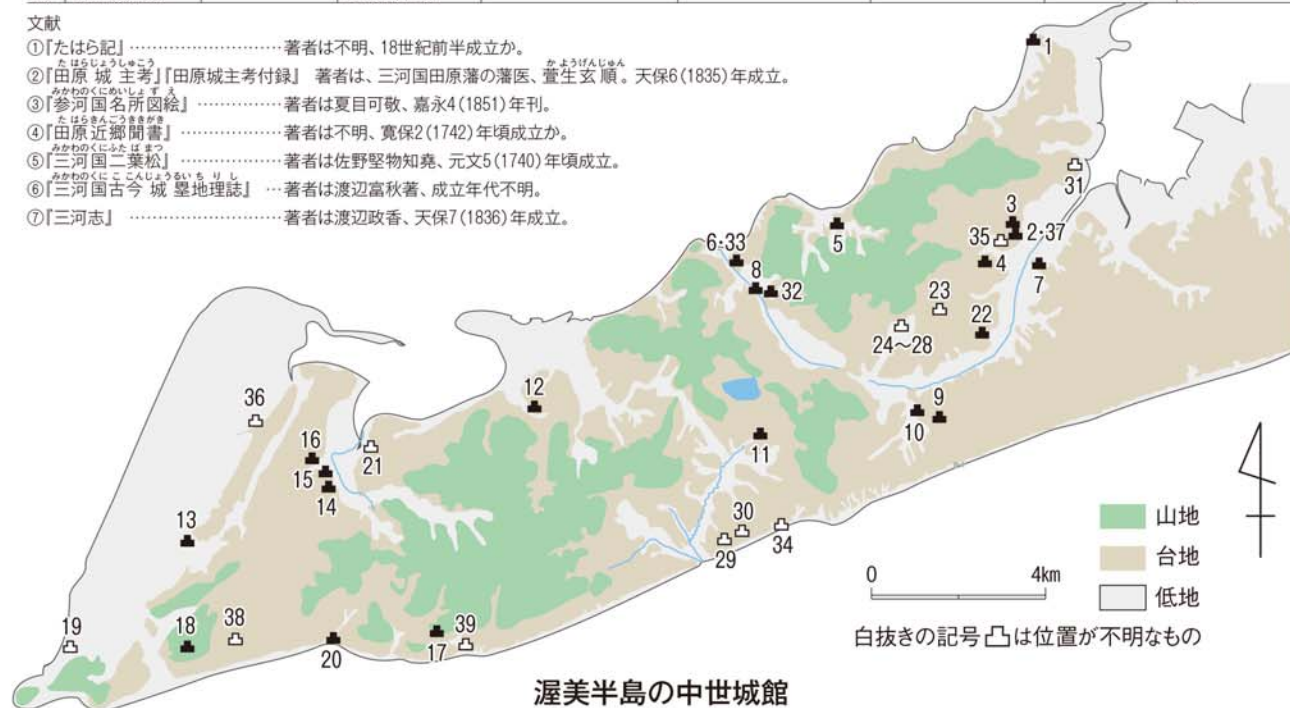
南北朝の争い…足利尊氏が京都の朝廷側を北朝(持明院統)後醍醐天皇その子孫(大覚寺の系統)で対立した。

応仁の乱…足利将軍家管領畠山・斯波両家の相統問題をきっかけとして、東軍細川勝元と西軍山名宗全とが、それぞれ諸大名を巻き込んで京都を舞台とした争い。

中世城館一覧

番号	城館名	別名	所在地	城主	存続時期	地名(字名・通称)	遺構	参考となる資料
1	波瀨城	波瀨館	波瀨町宮前	渡辺豊後(前)守弘、渡辺弥市郎	宝徳3年?~文明年間?(今川領国?)	殿屋敷、河合屋敷	不明(埋没?)	①②③④⑤⑥⑦
2	田原城	巴江城・今宮城	田原町巴江	戸田氏・朝比奈・本多・伊木・戸田氏・三宅氏	文明12年頃~明治4年	殿町、本町、新町、萱町、中小路、北番場、南番場	石垣、堀、土塁等	①②③④⑤⑥⑦
3	一色屋敷(A)		田原町五軒丁	一色七郎	15世紀(田原城築城前)		不明	①
4	加治砦		加治町取手	本多広孝	永禄7~8年	取手、北取手、東取手、西屋敷、二ノ丸、北之堀	—	①②③④⑤⑥⑦
5	仁崎御殿	仁崎館・戸田屋敷	仁崎町新田	戸田政光	大永6(1526)年~天文7(1538)年?	本城 市畑	不明	
6	本多屋敷		野田町西郷	本多新三	16世紀後半~(永禄8年?)		不明(埋没?)	①
7	堀池館	青津村古城	神戸町堀池	佐脇十根太夫 佐脇刀弥太夫	応仁・文明年代?	堀池	不明(埋没?)	①②④
8	林屋敷		野田町元屋敷	林刑部右衛門ほか	~天正18年(1590)	元屋敷・東屋敷・城海道・市場・市ノ西屋敷		
9	一色屋敷(B)		大草町前田	一色七郎	文明11~13年(1479~81)	前田、蔵屋敷、武兵	滅失 一色七郎の菩提を弔う宝徳寺	
10	藤塚長者屋敷		大草町藤塚	瀧美繁宗	~天曆4年(950)~		滅失	
11	赤羽根村古城	比留輪原城	赤羽根町中宝珠	小笠原守摂津守広元(蔵王寺文書)小笠原新九郎康元	永禄年間~天正18年(1590)		不明(埋没?)	①②③④⑥⑦
12	井河津古城	文徳屋敷	伊川津町御屋敷	惟修親王 伊河津七党	平安前期~戦国	御屋敷	不明(埋没?)	②③④⑥
13	龜山村古城		龜山町龜島池	烏丸大納言 龜山彈正左衛門 戸田彈正左衛門		本城原 城屋敷	不明	②③④⑥
14	保美上城	保美村古城	保美町仲新古	烏丸資任	応仁年間~文明14年?		不明(埋没?)	②③⑥⑦
15	保美下城	保美村古城	保美町平城	参木従三位実与	?	平城	不明(埋没?)	②③⑥
16	松淵砦	松淵城 松淵古城	福江町金五郎坂	戸田金右衛門			不明(埋没?)	③④⑥
17	和地城		和地町下大道	戸田尊次	天正12年~18年	北浦 お屋敷 北屋敷 庄司の屋敷	不明(埋没?)	
18	和名の城		堀切町和名山	楢垣氏 小笠原新九郎など	南北朝?	城山	曲輪、堀切	③⑥
19	伊良湖古屋敷	糟谷六郎工門屋敷	伊良湖町(不明)	糟谷六郎工門	16世紀後半 家康の功勞		—	⑦
20	馬場右京進居館	小塩津館	馬場町先祖畑	文安元年(1444)~大永3年(1523)	文安元年(1444)~大永3年(1523)	御屋布畑		
21	畠村古屋敷		福江町(不明)	間宮家	永禄年間~寛永16年(1639)?		—	②③④⑥⑦
22	西光寺陣跡		西神戸町神明前				—	
23	加治村古城		加治町(不明)	久世兵庫亮 黒川借宿次郎左衛門			—	①②
24	福井源兵屋敷		大久保町(不明)	福井源兵			—	①
25	田中四郎兵屋敷		大久保町(不明)	田中四郎兵			—	①
26	水谷基五兵屋敷		大久保町(不明)	水谷基五兵			—	①
27	原田弥二九屋敷		大久保町(不明)	原田弥二九			—	①
28	古城跡		大久保町(不明)				—	③
29	羽辺正介屋敷		赤羽根町(不明)	羽辺正介			—	①
30	高木九右工門屋敷		赤羽根町(不明)	高木九右工門			—	①
31	寺島弁之丞屋敷		吉胡町(不明)	寺島弁之丞	16世紀後半?(家康家臣)	殿屋敷	—	①②
32	戸田匠屋敷跡		野田町北社口				不明(埋没?)	
33	三宅館	馬草城	野田町西郷?	三宅藤右工門 藤左衛門	~永禄8年		不明(埋没?)	①②⑥
34	佐野安兵屋敷		赤羽根町(不明)	佐野安兵			—	①
35	田原城砦		田原町南番場(不明)				不明	①⑥
36	中山村古屋敷		中山町(不明)	間宮酒造允			—	②③⑤⑥
37	藤田基三郎屋敷(藤田曲輪)		田原町巴江				不明	①②
38	堀切村屋敷		堀切町(不明)	烏丸大納言			—	②④⑥
39	和地村城屋敷		和地町(不明)				—	⑥

- 文献
- ①「たはら記」……著者は不明、18世紀前半成立か。
 - ②「田原城 主考」「田原城主考付録」 著者は、三河国田原藩の藩医、重生玄順。天保6(1835)年成立。
 - ③「参河国名所図絵」……著者は夏目可敬、嘉永4(1851)年刊。
 - ④「田原近郷聞書」……著者は不明、寛保2(1742)年頃成立か。
 - ⑤「三河国二葉松」……著者は佐野聖物知堯、元文5(1740)年頃成立。
 - ⑥「三河国古今 城 堡 地理誌」……著者は渡辺富秋著、成立年代不明。
 - ⑦「三河志」……著者は渡辺政春、天保7(1836)年成立。

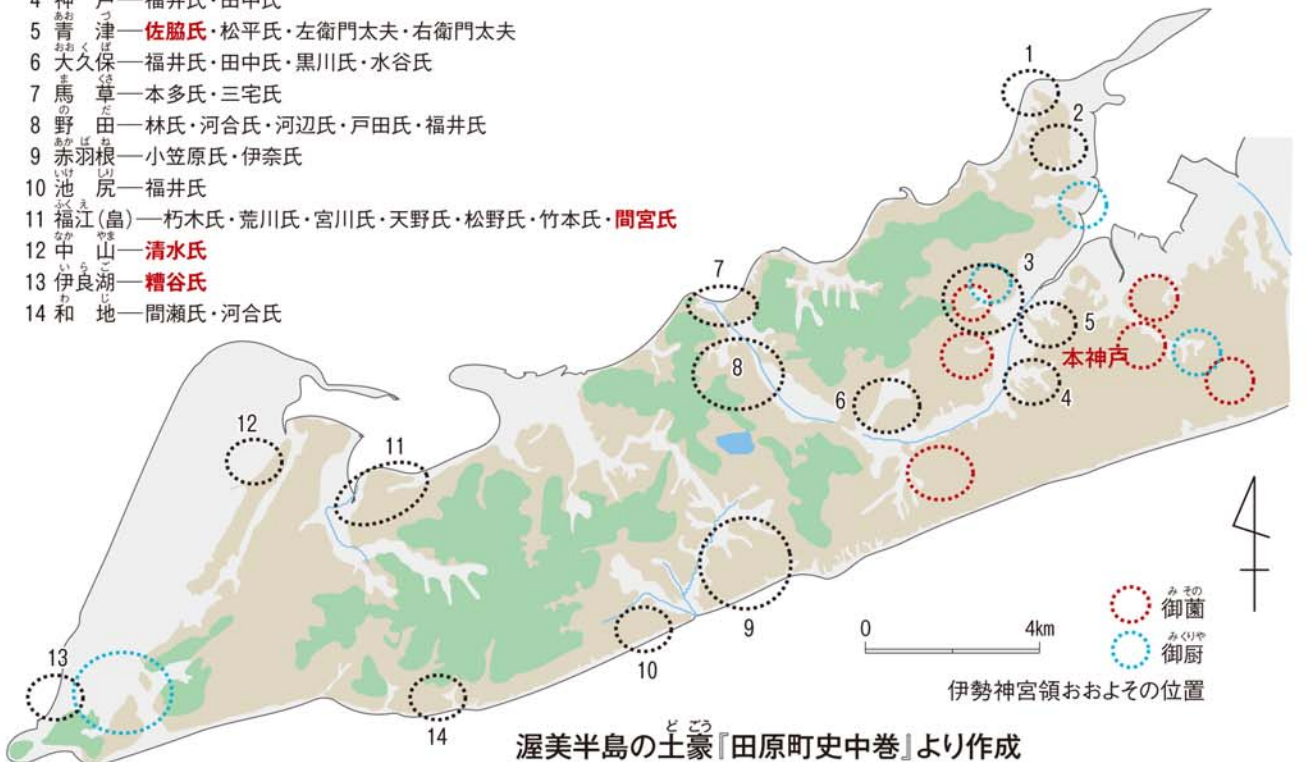


渥美半島の中世城館

歴代田原城主

代	城主名	生存年	城主在任期	備考
1	戸田 宗光	1439~1500頃	文明12年(1480)頃~明応9年(1500)頃	田原城築城・渥美半島統一 仁連木城築城
2	戸田 憲光	? ~1513	~永正6年(1509)	戸田氏全盛期
3	戸田 政光	? ~1548	~大永6年(1526)	仁崎に隠居
4	戸田 宗光	? ~1547頃?	~天文11年(1542)	
5	戸田 義光	? ~1547頃?	~天文16年(1547)頃?	今川勢により田原落城
	(天野景貫)?	?	天文16年(1547)頃	今川氏の城代?
	朝比奈元智	?	天文17年(1548)頃	今川氏の城代
	(岡部輝忠)?	?	永禄4年(1561)頃	今川氏の城代?
	朝比奈元智	?	永禄5年(1562)~永禄8年(1565)	今川氏の城代 家康田原奪取 今川敗退
1	本多 広孝	1528~1598	~天正5年(1577)	家康領国 禄高 2千7百20貫
2	本多 康重	1554~1611	~天正18年(1590)	広孝嫡子 上野国白井に移封
	伊木 清兵衛	1543~1603	~慶長6年(1601)	禄高 1万7千石 吉田城主池田輝政の城代
1	戸田 尊次	1565~1615	~元和元年(1615)	土佐守 伊豆下田より移封、禄高1万石
2	戸田 忠能	1586~1647	~正保4年(1647)	因幡守 尊次の子
3	戸田 忠治	1631~1699	~寛文4年(1664)	伊賀守 禄高2万1850石にて肥後天草富岡城へ移封、忠昌
1	三宅 康勝	1628~1687	~貞享4年(1687)	土佐守 三河孝母より移封 禄高1万1千石
2	三宅 康雄	1659~1726	~享保11年(1726)	備前守 康勝の嫡子
3	三宅 康徳	1683~1753	~延享2年(1745)	備後守 康雄の嫡子
4	三宅 康高	1710~1753	~宝暦5年(1755)	備前守 康徳の嫡子 了閑と号し南坊流茶の家元
5	三宅 康之	1729~1803	~安永9年(1780)	備後守
6	三宅 康武	1763~1785	~天明5年(1785)	備前守 康之の四男
7	三宅 康邦	1764~1792	~寛政4年(1792)	能登守 康之の五男
8	三宅 康友	1764~1809	~文化6年(1809)	備前守 康高の末男
9	三宅 康和	1798~1823	~文政6年(1823)	対馬守 康友の二男
10	三宅 康明	1800~1827	~文政10年(1827)	備前守 康友の三男
11	三宅 康直	1811~1893	~嘉永3年(1850)	土佐守 姫路藩より養子
12	三宅 康保	1831~1895	~明治2年(1869)	備後守 康友の庶子 友信の長男

- 1 波瀨—渡辺氏
- 2 浦—福井氏
- 3 田原—一色氏・戸田氏・藤田氏・丸山氏・久世氏・金田氏・加藤氏
- 4 神戸—福井氏・田中氏
- 5 青津—佐脇氏・松平氏・左衛門太夫・右衛門太夫
- 6 大久保—福井氏・田中氏・黒川氏・水谷氏
- 7 馬草—本多氏・三宅氏
- 8 野田—林氏・河合氏・河辺氏・戸田氏・福井氏
- 9 赤羽根—小笠原氏・伊奈氏
- 10 池尻—福井氏
- 11 福江(島)—朽木氏・荒川氏・宮川氏・天野氏・松野氏・竹本氏・間宮氏
- 12 中山—清水氏
- 13 伊良湖—糟谷氏
- 14 和地—間瀬氏・河合氏

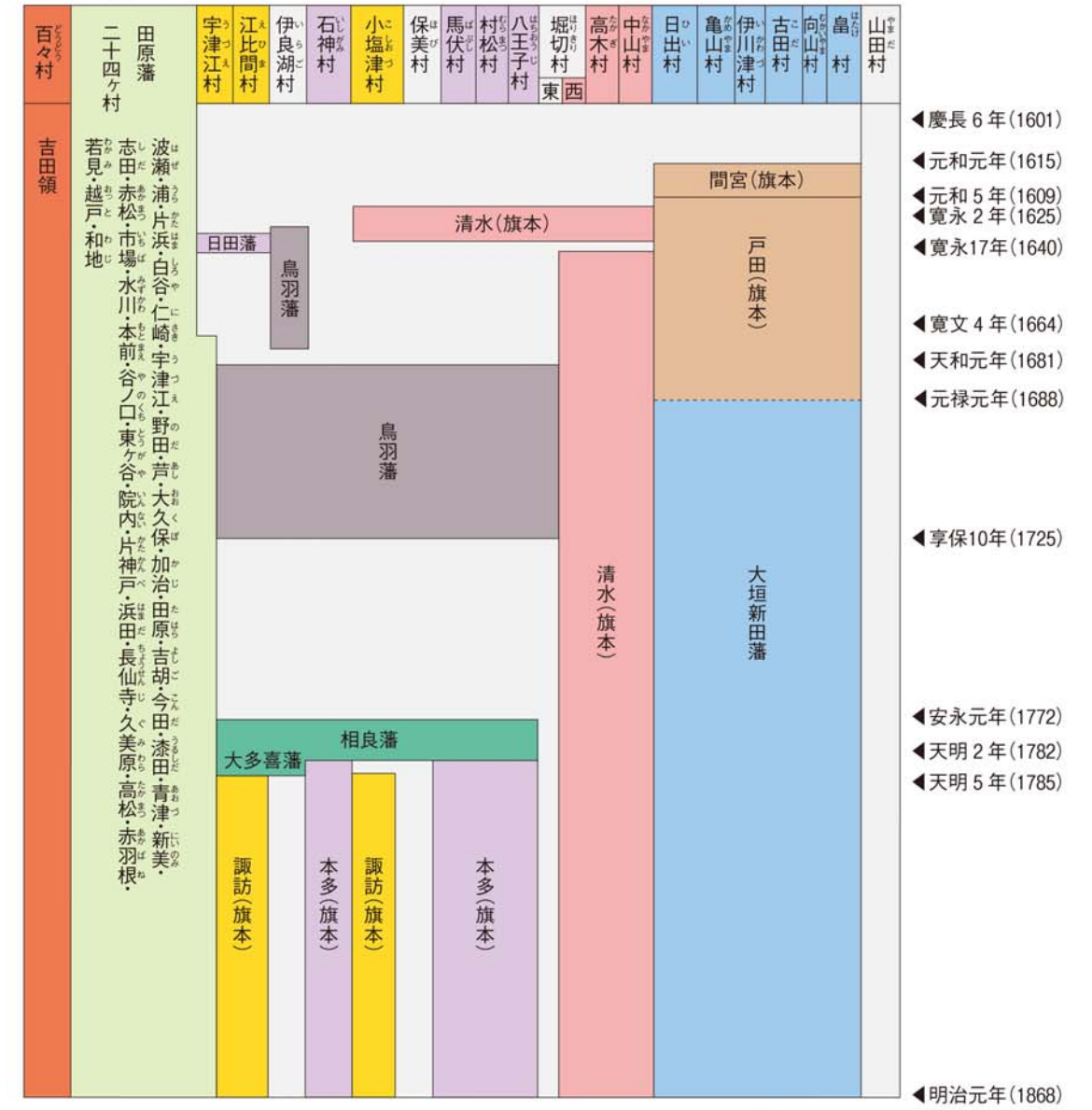


渥美半島の土豪「田原町史中巻」より作成

戦国から江戸時代の流れ

	南北朝時代	室町時代	戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	明治時代
	1400	1500	1600	1700	1800	1900
日本の出来事	1336 南北朝の争い	1467 応仁の乱始まる 1477 応仁の乱終わる	1560 桶狭間の戦い 1575 長篠の戦い 1582 信長、安土城に入る	1590 小牧・長久手の戦い 1600 豊臣秀吉全国統一 1603 関原の戦い 1615 豊臣家滅ぶ、一国一城令 江戸幕府を開く		1868 廃藩置県 明治維新
田原の出来事	この頃 半島は神宮の楡垣家領地であった	この頃 北朝の一色氏が渥美半島に侵入 この頃 一色氏範渥美郡代となる	この頃 戸田氏の奥郡攻め、中山村全焼 1475 今川家の要請で戸田宗光、大津城に移る 1480 一色七郎西軍として京都へ出兵 1467 烏丸資任保美に住居	1547 今川義元、田原城攻め 1529 松平氏が田原に攻め入る 1518 今川氏が田原に侵入 1564 戸田尊次伊豆下田から田原城に入る 1601 三宅氏拳母から田原城に入る	1664 三宅氏拳母から田原城に入る	
主な城館名						
波瀨城		?	1480?			
田原城						
一色屋敷(A)	1467					
加治砦				1564	1565	
馬草城						
仁崎御殿				1526	1538	
本多屋敷				1565?		
堀池館						
林屋敷						1590
一色屋敷(B)		1479	1481			
赤羽根村古城						1590
井河津古城						
龜山村古城						
保美上城						
保美下城						1482
松淵砦						
和地城						1584
和名の城						
伊良湖古屋敷						
馬場右京進居館		1444	1523			
龜村古屋敷						1639
西光寺陣跡						
寺島斧之丞屋敷						
戸田匠屋敷跡						
三宅館						
田原城砦						
中山村古屋敷						
藤田基三郎屋敷						
堀切村屋敷						
和地村城屋敷						

村々の領主変遷一覧



『渥美町史』より作成



たはら 田原城

別名●巴江城 今宮城

文明12年(1480)頃～明治3年(1870)



田原城遠景(東から)

田原城は田原中部小学校の北側に築かれていました。田原湾が新田開発によって干拓される江戸前期以前には、城のすぐ下まで干潟でした。満潮時には海水が城を取り囲むようで、あたかもその様が「巴文」状であったため、巴江城とも呼ばれていました。

この城は文明12年(1480)頃に戸田宗光が城を築きました。戸田氏はここを拠点とし、全盛期には豊橋の大崎城、仁連木城、知多半島南半分の河和・富貴にまで勢力を伸ばし、三河湾はおろか伊勢湾の制海権に深く影響を及ぼしたと考えられます。大久保彦左衛門著「三河物語」には、天文16年(1547)に今川氏のもとに人質として送り届けられる幼い松平竹千代(徳川家康)を戸田氏がさらって、織田信秀に送り届けた事件が書かれています。そのため怒った今川義元が田原城を攻め落城したという説があります。

戸田氏が城を明け渡したのち、今川氏の支配となり家臣を置きます。今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に敗れた後、松平元康(家康)は、吉田城をはじめとする東三河の城を攻め、田原城も永禄8年(1565)、家臣の本多広孝親子が入城し、家康が関東に移るまで在城しました。天正18年(1590)、吉田城主、池田照政(輝政)の支配となり、関ヶ原の合戦後、戸田氏の子孫戸田尊次が伊豆下田から一万石で入封、三代在城したのち、寛文4年(1664)、三宅康勝が入城し、以後12代、幕末を迎えました。

現在桜門から本丸に至る周辺には石垣、水堀などがあり、近世城郭的な工事がなされていますが、その土台は戦国時代につくられた土塁、空堀で囲まれる曲輪で構成されています。おそらく曲輪の基本構成は変わっていないと思われます。

田原城は、北側から藤田曲輪、本丸、そして、南西に二の丸、南東に三の丸という配置です。残念ながら城の顔である天守はなく、二の丸の櫓がその役割を担

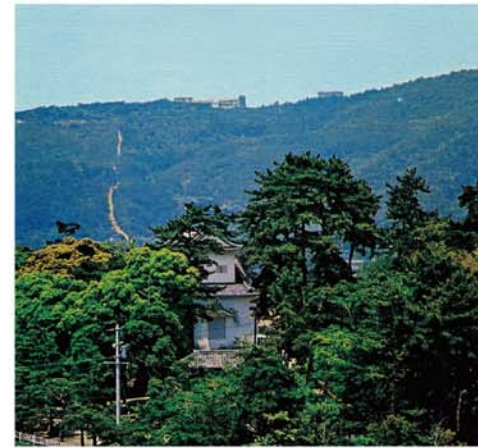
っていました。大手道から城内に向かうと、左前方に桜門、二の丸櫓が折り重なって見えます。天守を持たない田原城にとって十分な威圧感を発揮したに違いありません。大手道を進むと石垣に囲まれた袖池と呼ばれる水堀に突きあたります。桜門は西にずれた方向にあり、まっすぐ侵入できないようになっています。2回曲がらなければ門に入れません。袖池は、名前の由来となった着物の袖のように、三の丸を取り囲むために東側に屈曲し途中で切れています。もともと堀の東側の地形は低いため、堀を一周させることはできません。それでもここに水堀を設けたのは堀の延長を長く見せ、迫力のあるものにするための工夫です。

桜門をくぐると、二の丸櫓の石垣の角が眼前に迫ります。現在は神社の参道のため直線の道となっていますが、かつては本丸まで城道は、塀と門を組み合わせた広場(枳形)をつくり、見通すことはできません。これは攻めてきた敵を足止めさせるためです。

本丸に至る土橋の両側は空堀で、深さは6mもあり、戦国の城の姿を見ることができます。また、本丸の東の一部、西面に土塁が残っています。本丸はもっとも高い位置にありますが、独立した高台全体を選んだため、東西は無防備な状態です。そのため、曲輪を付け足して本丸が外と直接触れないように工夫をしています。田原城には天守はなく、本丸には御殿の建物がありました。

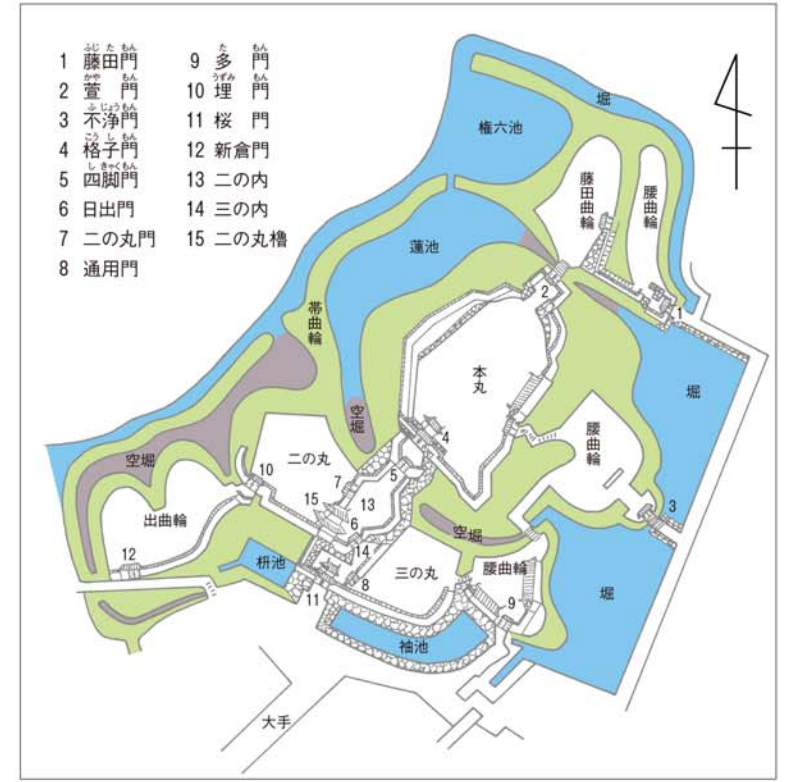
田原城のこれらの曲輪配置、水堀、石垣の組み合わせは江戸時代に最終整備されたと思われます。城の目立ちやすい正面にとってつけたような整備をしたことは、近世城郭に何が必要であったか、ということがわかります。派手な城ではありませんが、このような視点で見学するのも面白いでしょう。

城の最北には今はなくなった藤田曲輪がありました。築城以前にこの周辺に居住した土豪の名を付したものです。ここは、江戸時代には茶室等が設けられ、月見の会、歌の会が催され風流を楽しむ空間として利用されて



二の丸櫓跡に建てられた文化財収蔵庫

いました。平成5年に、この曲輪の発掘調査が行われ、戦火を受けた戦国時代の大量の中国製陶磁器が発見されました。貴重な焼き物を持つ戦国時代の戸田氏の勢力と、田原城が今川方に攻められ落城した生々しい証拠です。戦国の世のすさまじさがわかります。



田原城曲輪の配置



縄張図(高田徹氏作図参考)

田原城のみどころ

廃城後、田原城は明治23年、旧藩士全体の発起により、三の丸に公園が整備されました。昭和9年には、二の丸櫓跡に華山文庫が建設され、昭和30年には華山文庫を下に移動し、現在の二の丸櫓を建設しています。平成5年に二の丸に田原市博物館が建設され、周辺整備に伴い、桜門、土塀等を復興し、駐車場、トイレ、遊歩道等が整備されました。また、石垣は記録の上、積みなおしをしています。桜門は写真及び江戸時代の渡辺華山が描いたスケッチをもとにその外観を模しています。城跡の厳密な復元ではないものの、鬱蒼とした佇まいは歴史を感じさせる空間として、田原市博物館とともに市民の憩いの場所になっています。

● 柵池と袖池

桜門前の両側の堀です。袖池は着物の袖のような形をしていたことから名づけられました。柵池は文字通り柵のような方形の池です。袖池は石垣が積まれた水堀。よく見ると三の丸を囲むように北側に曲がって途切れています。記録によると地震で何度も崩れたため積みなおされています。桜門に近い三の丸下の石垣は使われる石材も大きく、田原城で最も古い石垣と言われています。



袖池



現在の桜門

● 桜門(平成5年復興)

惣門、本丸に入る格子門とともに二階建ての櫓門です。古い写真には門周辺の塀は漆喰で仕上げた白壁に瓦が埋め込まれた海鼠塀だったようです。また、門の壁は漆喰の仕上げだったようです。門内に入ると柵形になっていて、日之出門と相対していました。

● 桜門の石垣

左(西)側の石垣はレンガ積みのように一段一段の高さをそろえ、積んだ石の間に小さな石をつめています。右(東)側は、石を多角形に加工し隙間のないように組み上げた積み方です。水堀を含め東方向に人の視線を向けさせる計画をしているようです。



桜門西側の石垣



桜門東側の石垣

● 三の丸

桜門を入ると、右側の一段低いところが三の丸です。面積は360坪、大小三棟の穀倉が並んでいました。現在は、渡辺華山、村上範致、伊奈森太郎、岡田虎二郎の碑が建てられ、護国神社が置かれています。

● 出曲輪

江戸時代には華山神社のある周辺は新蔵と呼び、大小六棟の米蔵が並んでいました。吟味所を兼ねて、会所も建っていました。時々不正を裁く御白洲が開かれた様子が記録の中に出てきます。時刻を告げる太鼓楼も設けられていました。



渡辺華山が描いた出曲輪の内部(「客参録」)

● 出曲輪の土塁

華山会館駐車場の西側に現存する高さ4mにも及ぶ大土塁。西側のわずかな低みは堀の跡です。田原城でも古い遺構のひとつです。



出曲輪の大土塁(左の小高くなったところ)と堀



廃藩前の二の丸櫓(明治4年)

● 二の丸櫓

二の丸入口に、天守を思わせるような建物がそびえています。これが二の丸櫓です。田原城には、天守はなかったため、この櫓がそれにかわるものでした。廃藩時に解体されたときの記録では、大きさは3間×5間(約5.46m×9.1m)で、長方形でした。明治に撮られた写真や華山のスケッチによると櫓の壁は黒い下見板が張られた渋いつくりです。1層目には、入母屋の屋根がついた出窓がつけられています。おそらくこの出窓は石落としの役割も持っていたでしょう。現在の建物は昭和30年に、文化財収蔵庫のために建設されたものです。



渡辺華山が描いた桜門・二の丸櫓(天保4年「客参録」)

城下町をめぐる

① 霊巖寺 (田原城主三宅家の墓所・曹洞宗)

寛文4年(1664)三宅氏が挙母から転封した時に移されました。田原藩主三宅家代々の墓所があります。



② 神明社 (家康を祀る東照宮)

かつては田原城がある高台には今宮と呼ばれる社があり、築城のため、この地に移され神明社となりました。田原城の別名今宮城はここからきています。萱町・本町の氏神です。境内には古墳、徳川家康を祀る東照宮があります。



③ 八幡社

田原城主戸田氏の寄進状があります。境内には一色七郎とされる墓があります。新町の氏神です。

④ 燧池の跡

天文16年(1547)9月、田原城を守る戸田氏と今川氏との激しい戦いが繰り広げられ、多くの死者が出ました。周辺は戦死者の血で真っ赤に染まったそうで、緋血池一燧池といわれるようになりました。



⑤ 報民倉

渡辺華山の発案により、天保6年(1835)に天保の大飢饉の時に作られた備蓄倉庫。田原藩は餓死者も出さず幕府から表彰を受けました。

城下町は当時の権力者の都市計画に基づいて作られます。田原市内では城下町の様子が見られるのは田原城の城下町のみです。特徴ある町並みを持っていた町の様子も市街化によりその姿を失いつつあります。

⑥ 惣門跡

武士の屋敷を含む田原城の城域を囲う惣構の門です。手前には川が流れており、堀の役割もしていました。二階建ての櫓門で、田原城でも重要な門のひとつでした。田原城の入り口として、入城する人たちは石垣にそびえる門を見て、田原城の城主の力を感じたのです。現在は東側の石垣が残っています。惣門の遺構が残っているのは貴重です。



⑦ 本町通り

この通りは町屋が並び、通りに面して間口が狭く奥に長い典型的な商家の間取りです。さまざまな職種の商家が軒を連ね、藩の御用商人、醸造業など有力な商家もこの通りに並んでいました。

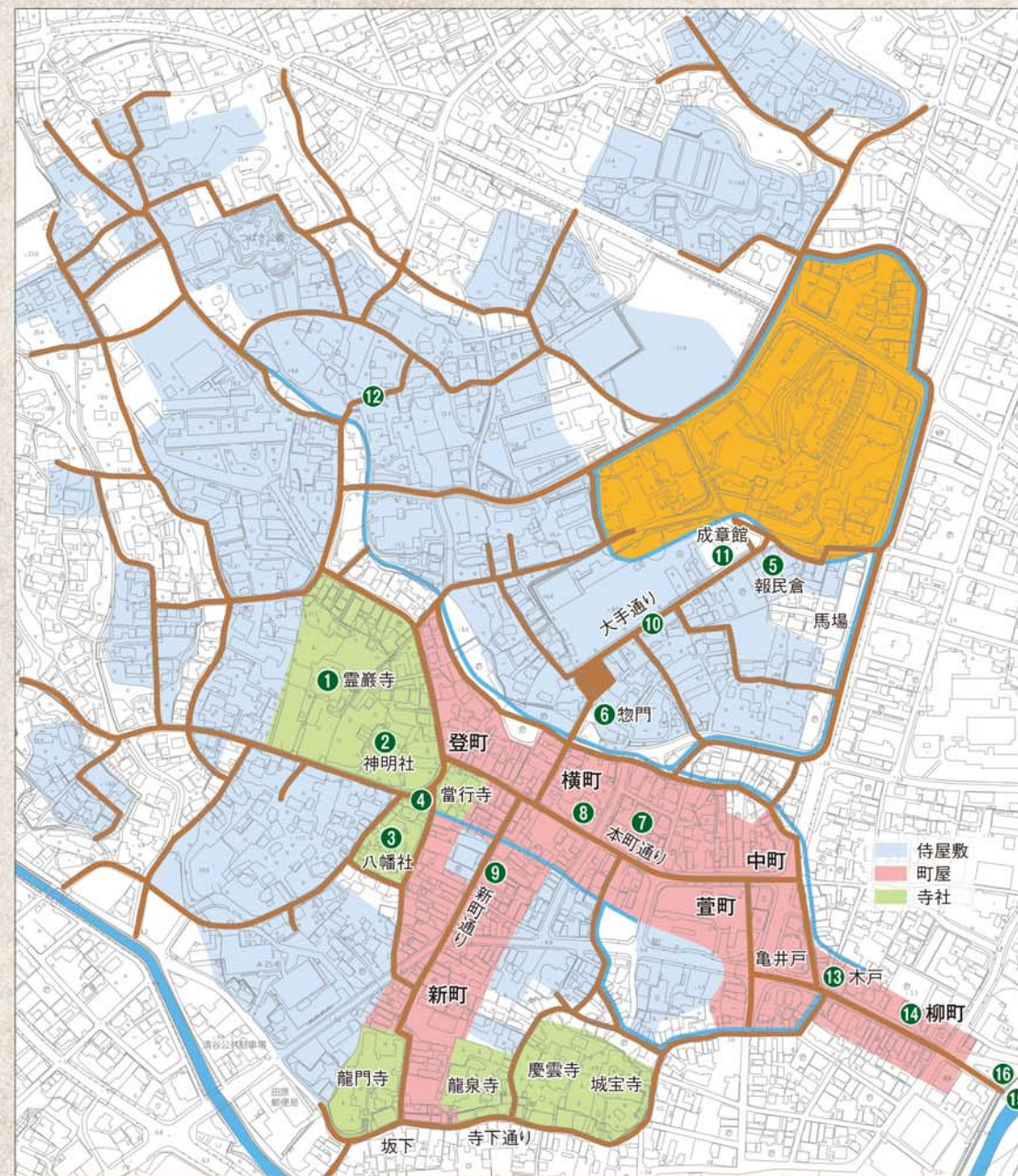


⑧ 伊能忠敬の滞留地 (広中六太夫邸跡)

我が国最初の実測地図を作った伊能忠敬は享和3年(1803)3月29日~4月10日に渥美半島に測量旅行に訪れ時の宿舎です。

⑨ 新町通り (北からの折れ曲がった道)

坂下の木戸から城に向かう道です。この通りは、直線的に進めないように、道路が折れ曲がっています。これは、敵が攻める際に真っすぐ進めないように、また守る際にも横からの攻撃がしやすいようにするため、城下町に見られる道路です。



⑩ 椿の生け垣

田原藩の武家屋敷には屋敷の境界をかたむすぶ生垣が見られます。田原城下町を代表するたたずまいです。

⑪ 木戸

ここは吉田方面からの城下町の入り口です。現在でも道路元票の石柱もあります。

⑫ 二七の市の写真 (柳町 昭和初期)

二七の市は、戦国時代、田原城下町ではじめられた六斎市(月に6回)がルーツといわれています。昭和34年頃まで、旧国道、そして船倉橋西広場~あつみの郷(旧渥美病院)北側~松下公共駐車場(昭和57年)~街の中心市街地「セントファーレ」(平成21年)~三河田原駅周辺(平成26年)に場所を変えました。500年余り受け継がれている田原で最も古い伝統です。



⑬ 大手通り



⑭ 成章館 (藩校成章館跡)



文化7年(1810)年につくられた田原藩の学校です。県立成章高校の前身です。

⑮ 船倉橋

吉田から田原城下町に入るための橋です。この橋の北側にあった船倉湊から名づけられています。川を渡って二度折れ曲がってから柳町へ抜け城下町に入ります。正保年間(1644~1647)の絵図にはこの橋が描かれています。橋がかけられる以前の田原城下に入る陸の道は、神戸町から加治町を通って入っていました。

⑯ 常夜燈

城下町の亀井戸にあったものが移されました。城下町の防火、安全を願って建てられました。寛政11年(1799)の銘があります。



和名の城

田原市堀切町●城主 不明

時期(不明)南北朝?



和名の城がある城山の遠景(中央の山)

渥美半島の先端近く、堀切町の城山(標高138m)の山頂に築かれています。築城の時期や城主についての定説がなく、江戸時代の記録には今川方の小笠原新九郎説、徳川2代将軍秀忠の狩場の陣地説、足利義政の家臣烏丸資任説がありますが、後ろ2説については当時でも疑わしいとしています。また、南北朝時代の南朝方の砦跡という言い伝えもあるため、南朝を支えた伊勢の北畠氏、度会氏とともに、南朝方であった渥美半島の神領地を支配していた松垣氏が北朝勢に対抗するために築城したのではないかという魅力的な説もあります。城の様子を伝える江戸時代の『三河城址地理志考』という記録に、「城の形は陣地の城のようで、山の東南は険しく西北も同様だが、ふもとは平地であるが城主の屋敷跡らしきものもない、非常時の陣地的な城で、海の見張りを置いた城か?」と記しています。この本ができた江戸時代終りには、すでに由来が分からない城となっていたのです。山頂付近に現在みられる遺構には、大小の箱を二段積んだような平らな面(曲輪I・II)が確認できます。北側には大きな穴が2つあり、北東方向にも大きな穴があります。その先には山の尾根を切るように堀が横断しています。この堀は尾根



縄張図(高田徹氏作図参考)1/2500

伝いに上がってくる敵を防ぐために設けられたと思いますが、幅、深さともに小規模で役割を果たせるか不安です。城山には、太平洋戦争時に陣地が設けられており、爆弾の大きな穴は軍の施設だった可能性もあります。したがって、築城当時の遺構がどれだけ残っているか分かりません。城山が南北朝の城であるという説も、文献や城の構造の分析からも現在のところ証明できていませんし、戦国時代のものともいえないのです。しかし城主は分からなくても、かつて城が存在したことは間違いなく、渥美半島では珍しい山頂に立地する貴重な城です。



和名の城のようす(I)・頂上付近



堀切

コラム

地図に描かれた城

現在では城跡のようすはわからなくても、古い地図によってその概要がわかる城があります。廃城となってもこの絵図が作られた時点で、人々の記憶や言い伝えでその場所が認識され、また堀や土塁などの遺構が残っていたようです。時折、地籍図には古い土地の区画が記録されている場合があります。

亀山村古城(亀山町)

この古地図は、江戸時代に描かれた村絵図です。豊島池に突き出るように「城屋敷」の場所が記されていますが、堀や土塁など城の構造がわかるような記述はありません。



慶安2年(1649) 亀山村古絵図写

井河津古城(伊川津町)

この絵図は、江戸時代(貞享4年1687)の境界論争の地図です。ここには、城の区画が描かれています。もうひとつの図は、明治時代初めに作られた地籍図です。畑が水路と藪に囲まれ、方形の土地区画を示しています。この方形の土地が、すなわち城の跡です。



七ヶ村入会草山争論絵図(部分)



明治時代の地籍図 1/5000

わ じ じょう あと 和地城跡

田原市和地町◎城主 戸田尊次

天正12年(1584)～天正18年(1590)



和地城周辺の現況(西より) 左の森は三島神社

城主は戸田尊次(1565～1615)で、小牧・長久手の戦の活躍により天正12年(1584)、和地村500石を家康から与えられました。天正18年、伊豆下田へ父忠次とともに移りました。在城期間は、わずか6年でした。しかし、再び田原に戻り慶長6年(1601)、田原城主となりました。

和地城は、太平洋に流れる川尻川の700mほど上流にあります。城は、和地町から福江(旧畠村)町へ抜ける道沿いにある三島神社周辺と考えられます。この道は、近世以前にも畠村へ行き来する大切な道でした。現在は、周辺に温室が立ち並び城の遺構とわかるものはありません。しかし、明治時代に作られた地籍図や

昭和39年の地図には城の痕跡が見えます。三島神社とその南側の畑を取り囲むように、川・湿地や水田があります。また、神社の前の道は、むかし溝があったところで、広がる前の旧道は現在の道路と神社の間を通っていたそうです。古い地図でも、西側の水田が入り込んでいるのがわかります。また周辺には水田や湿地に囲まれた畑が多数あります。このように水田や湿地などの低い土地が畑を取り囲むような様子は、この畑が堀に囲まれた城の曲輪と考えられます。この曲輪と考えられる区画の形はいびつで、おそらく川を堀代わりにするなど、自然地形を存分に生かして作られたためだと思われます。古文書の記録から三島神社の



耕地整理前の地図(昭和39年) 1/5000



明治時代の地籍図 1/5000

■ は水田・湿地

前が城の中心、すなわち本丸に相当すると考えられます。その大きさは160m×120mくらいになります。地元に伝わる古文書『田中安太郎備忘録』には、「一 庄司ノ屋敷ハ町宮前(御一新前迄ハ御屋敷ト稱シ明治ニ□ルモ御屋敷ト申シ居ル)ニアリ凡四五町ナラン明治二十年頃迄間瀬甚五郎所有畑中ニ幅貳尺余長廿十間程高サ六尺程ノ内堀アリ外廓ハ今ニ高サ六尺根敷六七尺ノ土手戌亥ニ当ル所ニ存在ス」と2郭の北端中央に高さ1.8m、長さ36mの土塁があったと記されています。また、土塁の内側に高さ1.8m、長さ36mの堀があったとか書かれていますが、城の土塁としては低いので、すでに壊されてわずかに残っていたものか、和地城のものかはわかりません。ただ、石垣もない土作りの城だったようです。

わずか6年で使われなくなった城。城の整備もままならず城主はいなくなりました。もし戸田家が転封にならなかったらいったいどんな城になったのでしょうか。想像はふくらみます。

参考資料◎「田原城主考」

「大山記二日 和地村ノ記録 戸田土佐守様(尊次)ト申奉ルハ、戸田三郎右工門(忠次)様御子ニテ御座候。三郎右工門様ニハ大津村(豊橋市老津町)ニ御屋敷ヲ構ヘ御座ナサレ候。御若殿甚九郎様ニハ和地村大名神(三島神社のこと)ノ前ノ畑、先祖安右工門力屋敷居宅ニテ罷在候」

コラム

渥美半島の海運と海賊

海運の要所だった伊勢湾は、古代から東西文化、文物が行きかう場所でした。伊勢湾に突き出た渥美半島には、主要な港をはじめ、海浜部の要所には古代以降の海人の流れを引く有力者が住み、伊勢湾の海運に関わっていたと考えられます。彼らが海賊、水軍となり、渥美半島はおろか東国の戦国時代に活躍したのです。

海賊というと、海を舞台に悪事を働くようなイメージがありますが、彼らは物質を輸送する船の安全、時には戦へ参加し手助けをし、当時の人々にとって頼りになり、また敵に回すと怖い存在でした。松平(徳川)家康の田原城(今川氏時代)攻めの間宮家、三方ヶ原の戦いで伊良湖の糟谷家など、家康方につき手柄をあげ取り立てられたことが知られています。渥美半島を最初に統一した戸田氏が全盛期には知多半島の一部にも領地を広げ三河湾はおろか伊勢湾の海上交通にまで大きな力を持つようになったのも、「海賊」である彼らを味方につけたことが大きな理由です。これを示す資料に、田原城藤田曲輪から出土した多量の陶磁器類があげられます。この中には戸田氏の時代より200年前に焼かれた中国製の元様式の花瓶が含まれています。この花瓶は骨董品的なもので、当時の戦国大名の憧れのタカラモノでした。

一水軍たち一

この元様式の遺物は戦国大名の城や有力寺院くらいしか発見されていません。このようなタカラモノを持つことができるのは、戸田氏の海上交通にかかる力を示すものでしょう。その原動力となっていたのは、渥美半島に住む海を生活の舞台にした人々たちなのです。



田原城で見つかった元様式の花び



間宮家の墓(福江町梧栖院)

コラム

戦争遺跡も城か？

渥美半島は明治33年に陸軍の大砲試験射撃のため伊良湖試験場が整備され、関連する施設の整備が進みました。さらに渥美半島は太平洋戦争時に、アメリカ軍の本土上陸地計画の対策として、渥美半島から遠州灘を望む一帯には、第73師団が配置され、防御陣地などが構築されています。

時代は新しくても、太平洋戦争に築かれた陣地跡も軍事施設、という定義であれば城の仲間に入るといえます。城と同様にこれら戦争遺跡も平和な世界を作るための負の文化財として、注目を浴びています。また地域の歴史資料として活用していくためにも今後十分に調べるべき遺跡と言えるでしょう。

番号	名称	住所
1	笠山の機関銃陣地	浦町笠山
2	蔵王山陣地	吉胡町・田原町・白谷町
3	野田の監視 砲	野田町小山
4	高松陣地	高松町尾村崎
5	鬼 墮 陣地	若見町鬼墮
6	越戸陣地	越戸町古今
7	山田陣地	山田町郷戸
8	和地の壕	和地町北山
9	一色観測所	和地町寺口
10	一色機関銃陣地	和地町前畑
11	小塩津陣地	小塩津町藤尾
12	右膳坊観測所	小塩津町後山
13	和名山陣地	堀切町和名山
14	骨山陣地	日出町骨山
15	外浜観測所	日出町骨山
16	伊良湖水道機雷封鎖監視所	日出町骨山
17	28榴榴弾砲陣地	日出町骨山
18	伊良湖岬の陣地	日出町古山
19	畠観測所	古田町岡ノ越
20	陸軍第一技術研究所伊良湖試験場	小中山町

陣屋と御殿跡

ここで紹介するのは、江戸時代以降にあった陣屋や御殿跡です。陣屋は、大名、幕府、旗本の直轄地におかれた城以外の出張所的な施設や屋敷跡です。田原市には大垣新田藩陣屋(元禄元年～)、旗本清水氏の中山陣屋(寛永2年～)・本多氏の八王子陣屋(天明2年～)がありました。また藩主などの領主の隠居屋敷(御殿と通称)なども関連の施設として紹介します。

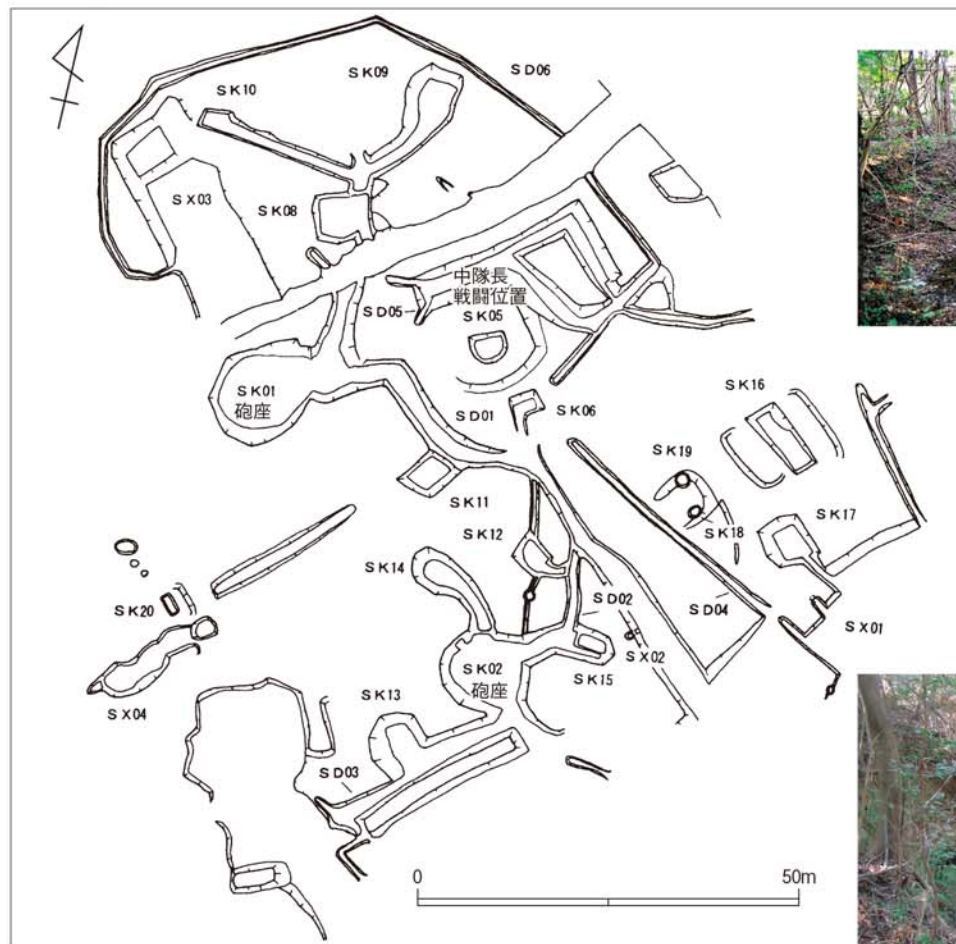
陣屋は役所的な目的で作られ、他の屋敷についても城と違い軍事的な役割は重視されていません。しかし戦国時代の「城」と呼ばれるものは、ふだんの住居が争い時に軍事的な役割をするものも含まれています。したがって、構造的にも領主の屋敷(陣屋・御殿

も)と城をはっきり分けることができません。また、陣屋や屋敷には武家の格式を示すため城のような土塁、堀、石垣や建物をつくることもあります。

渥美半島の陣屋などの領主は、清水氏や間宮氏のように家康に仕えた由来を持つ家ばかりであることも注目され、戦国時代の屋敷をそのまま利用した(例えば大垣新田藩陣屋、中山陣屋)と考えられます。

田原藩主の隠居屋敷である吉胡町の矢崎御殿(文久3年～)・山際御殿(宝暦5年～)、豊島町の安原御殿(天保11年～)があります。いずれも1代の短期間で使われたものです。

ここで紹介するものは当時の面影をしのぶものは残っていません。大垣新田藩の陣屋以外は敷地も建物もどのようなものであったかの記録すら残されていないのです。矢崎御殿については、その一部が波瀬町の願照寺に移されたともいわれ、石垣も見られますが、御殿のものはわかりません。間宮氏の古田村古屋敷跡(元和5年～)には表・裏門が明治時代までありましたが、その大きさや形などは壊されてわかりません。八王子陣屋跡周辺には、陣屋川という名前も残っています。しかし、これらすべて、現存する遺構がないため地元の人ですら知らない場合も多いでしょう。安原御殿があった安原崎は現在「御殿山」という安原御殿にちなんだ地名となりました。



伊良湖陣地(伊藤厚史氏作図)

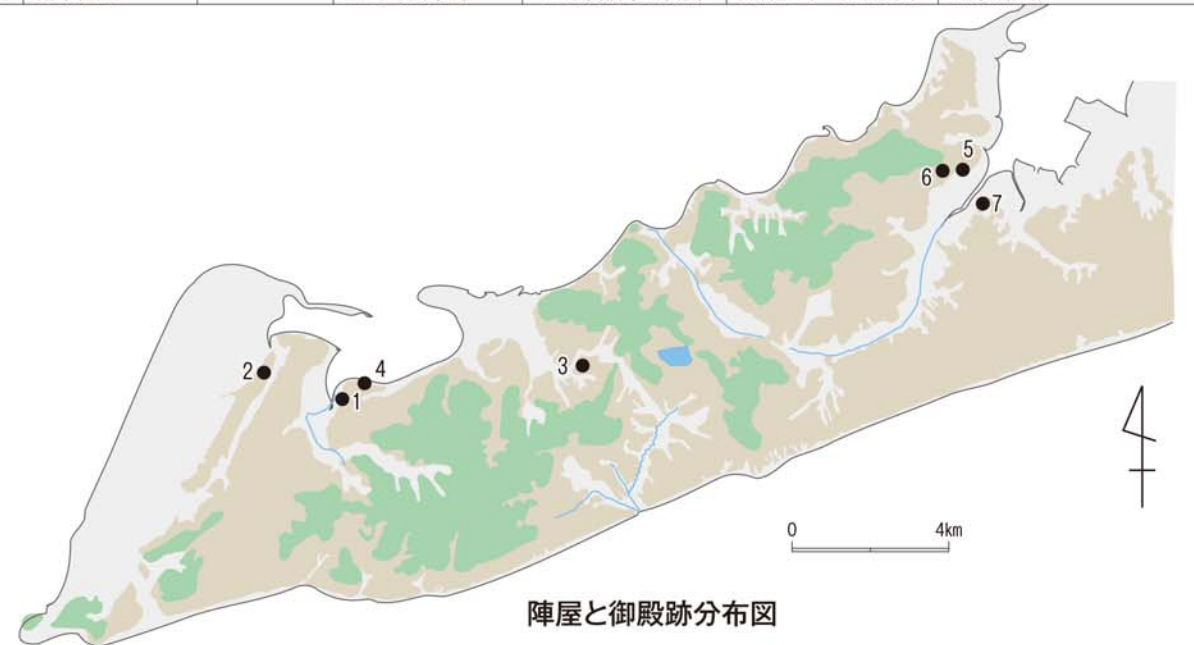


伊良湖陣地の砲座



和名の城陣地跡の穴

番号	名称	別名	所在地	設置者	存続時期	備考(主な文献等)
1	大垣新田藩陣屋	戸田家陣屋 畠村陣屋	福江町中紺屋瀬古	大垣新田藩	元禄元年～明治4年	渥美町史 畠村万附日記
2	中山陣屋		中山町成美	清水氏(旗本)	寛永2年～明治元年	渥美町史
3	八王子陣屋		八王子町道下	本多氏(旗本)	天明2年～明治元年	渥美町史
4	古田村古屋敷		古田町背戸山	間宮之等	元和5年～明治元年	渥美町史
5	矢崎御殿		吉胡町矢崎	三宅康直(田原藩)	文久3年～元治元年	田原藩日記
6	山際御殿		吉胡町木綿畑?	三宅康高(田原藩)	宝暦5年～?	田原町吉胡郷土史
7	安原御殿		豊島町安原崎	三宅友信(田原藩)	天保11年～弘化元年	田原藩日記



陣屋と御殿跡分布図

おお がき しん でん はん じん や 大垣新田藩陣屋

別名●戸田家陣屋 畠村陣屋

田原市福江町

天正年間～明治4年(1871)



大垣新田藩陣屋跡の現況

この陣屋は大垣新田藩(岐阜県大垣)の飛び地を管理するための陣屋でした。しかし、これまでにいたる過程は複雑です。戦国時代の間宮氏の間宮家(1615～)、戸田氏が旗本として(1619～)この地を治めていました。引き続き戸田家が大垣新田藩の藩主となつてから(1688～)は陣屋として存在し、日出村、亀山村、伊川津村、古田村、畠村を治めていました。明治2年5月28日、野村藩と改め、廃藩置県後の明治4年7月14日は野村県となりました。現在でも領地内には福江町「代官」、「郡治」(向山町)という近世の支配地にちなんだ地名が残っています。間宮家と戸田家は血縁関係にあって、戦国間宮氏に由来する間宮家の屋敷跡をもとに大垣新田藩の陣屋が設けられたと考えられます。

陣屋の建物は福江市民館の南にありました。ここは、畠港、古田港を臨む台地上です。出土した遺物には、陣屋時代の陶器のかけらも見つかっていますが、陣屋ができる前の間宮氏が使ったものと考えられる戦国時代のものも一部見つかりました。「元野村縣出張畠村廳之図 附土族邸地」という古絵図には、陣屋と藩士の屋敷が記されています。この図の北には堀と土塁が記され、図に描かれた屋敷群を囲む区画であると考えられます(以後大区画と呼びます)。この土塁と堀は、南西の稲荷社まで廻っていたようです。この大区画は200m×90mの広さとなります。大区画内には、屋敷18区画、畑4区画、神社1区画が記されています。陣屋(役所建物)は他の区画の倍ほどの広さで、55m×25m程度の長方形です。

建物の様子は、渡辺崋山筆「参海雑誌」(天保4年)に残されたスケッチによって知ることができます。陣屋の正面を西方向からスケッチしたもので、石垣と冠木門2箇所、長屋門1棟、柵、そして奥に陣屋の建物が描かれています。

図に書かれた名前を藩の名簿などで調べると大区画内には身分の高い武士が住んだようで、ここに住居

するにはある一定のきまりがあったようです。しかし、その中には畑があるなどの特色が見られます。

現時点では、陣屋を偲ぶ遺構は残っていませんが、地中には、当時の遺構が埋まっているでしょう。周辺の町屋(集落)の土地の区画は、ブロック形で田原城下町の町屋に見られる短冊形の形をしていません。田原方面から保美を過ぎて中山、伊良湖に抜ける街道は、陣屋の下段を通過しています。この街道沿いには蔵屋敷が配置され、三河湾の海運によって栄えた商家が軒をつらねていたようです。この街道から南の和地村に抜ける道沿いに西に向けて陣屋の入口があります。この入り口までの坂を現在でも「城坂」と呼んでいます。陣屋の道をへだてた南側の三角地には、郷蔵、津島社が配されていました。また、陣屋の東には、間宮家の菩提寺である栖了院があります。

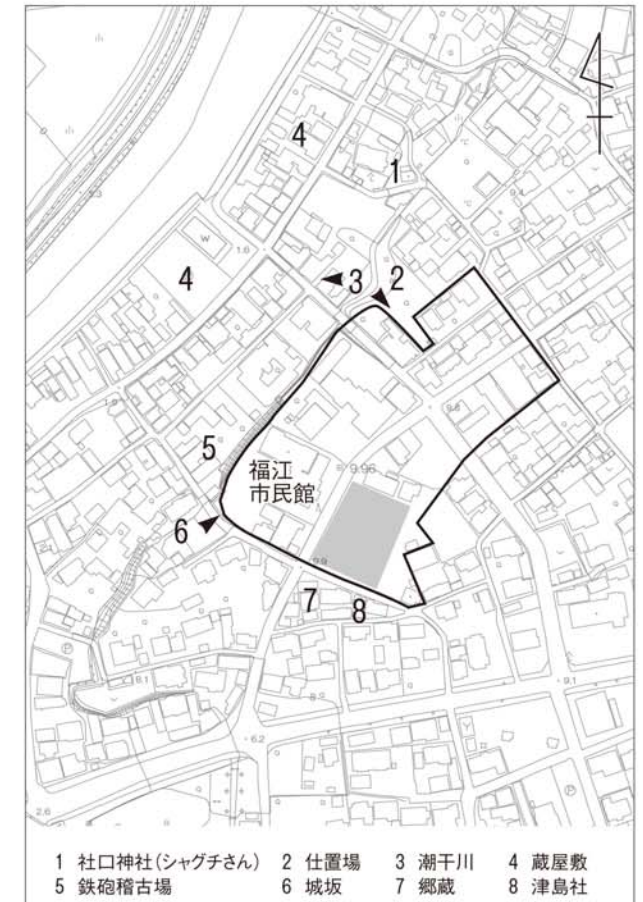
陣屋の北の台地端には「仕置場」と、潮干川と呼ばれていた川がありました。この川は「仕置川」とも呼ばれ、処刑の血を流した、という言い伝えが残っています。また関連して「血の滝」、「首切りの井」と呼ばれる地名が伝えられています。陣屋に関係したと思われるものに、鉄砲稽古場の言い伝えがあります。



崋山が描いた陣屋跡(「参海雑誌」)



「元野村縣出張畠村廳之図 附土族邸地」より



大垣新田藩陣屋周辺の地形図(渥美町都市計画図 1/5000)

コラム

地名に残された城館

現在残る遺構、また古絵図ですらも確認できず、位置も不明な場合、ほかに情報を得る手立てはないでしょうか。



城坂(大垣新田藩陣屋跡付近)

加治砦跡があった周辺には、現在でも取手、東取手、二の丸など「城」に関わる地名もあります。

波瀨城には、通称「殿屋敷」、八王子陣屋跡には「陣屋川」という名前があります。また、城が存在しない場所にも期待がもてそうな地名がありますが、「〇〇屋敷」という場合は、城館ではない家の屋敷を意味する場合があります。



加治砦跡 市街化が進んで旧状がわからない

かい ぼう し せつ 海防施設



赤羽根遠見番所

江戸時代の終わり頃になると、外国との交流を絶っていた日本にも外国船があらわれ、その恐怖を感じるようになりました。渥美半島は、太平洋に面している土地でしたので、そこに住む人たちは外国への恐怖をいち早く感じていました。特に田原藩は、他領に比べ太平洋岸に最も広く面しており、その思いは強かったはず。当時、幕末の対外関係の緊張感から、軍事科学の発展とともに海岸の防備が強化されました。田原藩では、渡辺崋山(1793~1841年 画家・蘭学者)、三宅友信(1806~1886年 兵学者・蘭学者)、鈴木春山(1801~1846年 兵学者・蘭学者)、村上範致(1808~1872年 西洋砲術家)など全国的にも有能な人材に恵まれ、他藩より海岸防備の認識は高かったといえます。異国船の対策のための海岸の防備の方法は、ひとつには非常時の訓練、いまひとつに施設の整備があげられます。幕末では全国的に西洋式砲術が導入され、施設もそれに合わせた西洋式のものが整備されていきます。

- **遠見番所** 遠見番所は、異国船を遠眼鏡で見張るもので、人が常駐していたと思われます。海を見渡すことのできる海岸沿いの高台が適地です。
- **砲台(台場)** 砲台は、大砲(大筒)を備えた施設です。田原藩では天保はじめまでは常備されていなかったと思われる、天保13~14年以降に整備されていたと思われます。また、常設的な場所のほか、緊急時に配置される場合もあったと思われます。
- **のろし台** 異国船の発見、領内の非常配備などを煙で知らせる通信施設です。城から確認しやすい山頂や、中継する場所に設けられています。

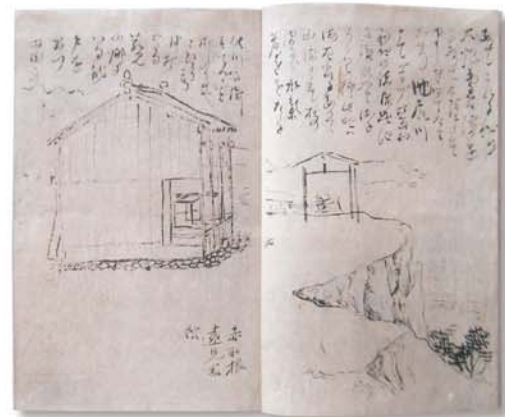
海防施設の最も古い記録は、元文4年(1739)に田原藩によって設けられた遠見番所です。また天保の4~8年(1833~37)にかけて久美原町、赤羽根町、和地町に砲台が築られました。そして西洋砲術の導入と

もに田原藩では軍事改革が行われました。村上範致は高島秋帆に入門し、西洋砲術を修め、天保13年には大砲の鋳造をおこないました。また村上のもとに全国から門人になるために訪れています。田原藩は最新の西洋砲術のメッカでもありました。天保14年には、田原藩は全面的に施設を整備し、太平洋岸ばかりでなく、三河湾側にまでも施設を整備しました。ここまで入念に行うことは珍しく、それほど海岸防備に力をいれていたのです。西洋砲術を修めた村上の力により、天保13~14年を境に田原藩の海岸防備が大きく変わり、嘉永3年(1850)には西洋砲術に統一されました。

また吉田藩の飛び地だった百々村にも台場が備えられました。大垣新田藩の日出砲台から、久美原砲台まで、砲台が整備されていますが、ふしぎなことに神戸町の海岸には海防施設の記録がなく、ぽっかりと空いた状態になっています。

大垣新田藩が築いた日出砲台(元治元年)は図面が残されており、砲台の形や設置された大砲までが記されています。砲台の整備が進むと大砲の種類も増え、西洋式の大砲も用いられるようになりました。それぞれの目的で各砲台に備え付けられましたが、基本は異国船を追い払うことを目的としていたようです。

このように渥美半島には多くの海防施設が設けられ



崋山が描いた赤羽根遠見番所(『参海雑志』)

たにも関わらず、残念ながらその遺構を見ることはできません。地元の言い伝えもあまり残されておらず、田原藩日記などの古文書の記録を参考にするしかありません。

それでも正確な場所すらわからない場合が多く、その理由は大規模なものでなかったことや、海岸が削られなくなってしまったのかもしれない。

渥美半島の海岸防備施設一覧表

番所

番号	名称	所在地	設置者	存続時期	参考となる資料
1	和地遠見番所	和地町?	田原藩	? ~天保14年~?	①②
2	赤羽根遠見番所	赤羽根町西瀬古	田原藩	元文4年~ ?	①②③
3	百々番所	六連町?	吉田藩	元文4年~ ?	①豊橋市史
4	谷ノ口遠見場	南神戸町方辺?	田原藩	寛政5年~ ?	①
5	久美原遠見番所	六連町中浜辺、西海岸	田原藩	元文4年~ ?	①②

砲台

番号	名称	所在地	設置者	存続時期	参考となる資料
6	日出砲台(高砲台)	伊良湖町骨山	大垣新田藩	天保15年?~元治元年~?	渥美町史
7	日出砲台(平地砲台)	?	大垣新田藩	天保15年?~元治元年~?	渥美町史
8	和地砲台	和地町?	田原藩	天保8年?~天保14年~?	①②渥美郡史
9	池尻大筒台場	若見町?	田原藩	天保14年~ ?	①
10	赤羽根砲台	赤羽根町赤中?	田原藩	天保4年~ ?	①②③
11	高松砲台	高松町蟬ヶ沢	田原藩	文久3年~ ?	①
12	百々砲台	六連町中郷中	吉田藩	? ~弘化元年~?	渥美郡史、田原記聞
13	久美原砲台	六連町中浜辺?	田原藩	天保8年?~天保9年~?	①②渥美郡史
14	馬草大筒台場	野田町小山	田原藩	天保14年~ ?	①②
15	白谷大筒台場	白谷町?	田原藩	天保14年~ ?	②
16	波瀬大筒台場	波瀬町西郷	田原藩	天保14年~ ?	波瀬村庄屋日記(田原町史)
17	浦大筒台場	浦町?	田原藩	天保14年~ ?	②

のろし台

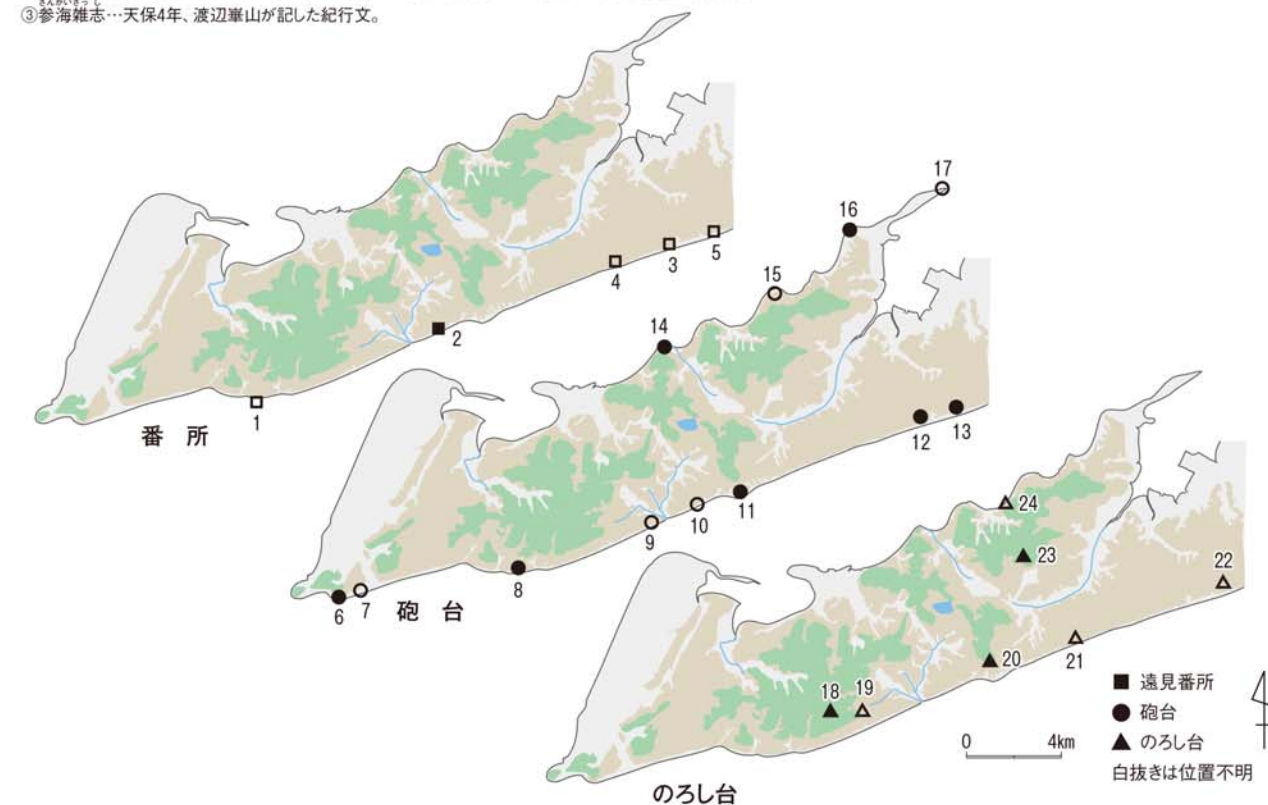
番号	名称	所在地	設置者	存続時期	参考となる資料
18	和地大山のろし台	和地町北山	田原藩	天保6年~ ?	①②
19	若見のろし台	若見町?	田原藩	天保14年~ ?	②
20	高松のろし台	高松町尾村ヶ崎?	田原藩	天保6年~ ?	①②
21	大草のろし台	南神戸町?	田原藩	弘化3年?~ ?	大草史
22	久美原のろし台	六連町狐川	田原藩	天保14年~ ?	②
23	富士尾山のろし台	大久保町小祠	田原藩	天保6年~ ?	①
24	仁崎のろし台	仁崎町?	田原藩	天保13年~ ?	①

①田原町教育委員会「田原藩日記」第1巻~第8巻

②「海岸防備陣容」(仮題)、天保14年2月、田原藩から老中土井利位あてに提出した海岸防備の計画書。

③参海雑志…天保4年、渡辺崋山が記した紀行文。

※資料に記されている名称



ひいほうだい 日出砲台

田原市日出町骨山



日出砲台(高砲台)から東を見る

日出砲台は元治元年(1864)、大垣新田藩が朝廷から伊勢神宮を守るよう要請されたために築かれました。古文書の記録から2か所あったことがわかっています。一つは約18m×30mの大きさで、大砲3門を備え「海面潮満高二十五間余砲台」に位置する仮称「高砲台」。もう一つは約9m×18mの規模で、大砲3門を備え「従海面潮満止 遠30間」に位置する「平地砲台」です。「高砲台」は、満潮時の海面から45mほどの高さがあり、鳥羽と神島を申(西南西)の方向に望む位置とすると、「椰子の実」記念碑が立つ日出園地がその場所にあたります。

「平地砲台」については、満潮時の波打ち際から54mで平地の場所を考えると、骨山東の海岸沿いにあっ

たようです。また、「高砲台」との砲撃範囲の重複を避けるため、離れた位置にあったのではないのでしょうか。高砲台に備えられた3門の大砲は、西面に18ポンドカノン、南面に15ドイムホウイッスル、東面に12ドイムホウイッスルの西洋式の大砲でした。カノン砲は実弾(中実丸)を使い、砲身が長いので命中性にすぐれ、かつ射程距離もかなり遠くまで到達します。また弾道が低いので衝撃力が強く、直接目標を破壊するのに適しています。ホウイッスル砲は榴弾(火薬入りの砲弾)が撃てるものです。日出砲台の大砲の玉の径は12~15cm程度であり大きくありません。しかしさまざまな場合に対応できるように大砲を備えていることが特徴です。

高砲台の形はいびつな台形で入り口から左面と正



日出砲台の位置(1/10000)

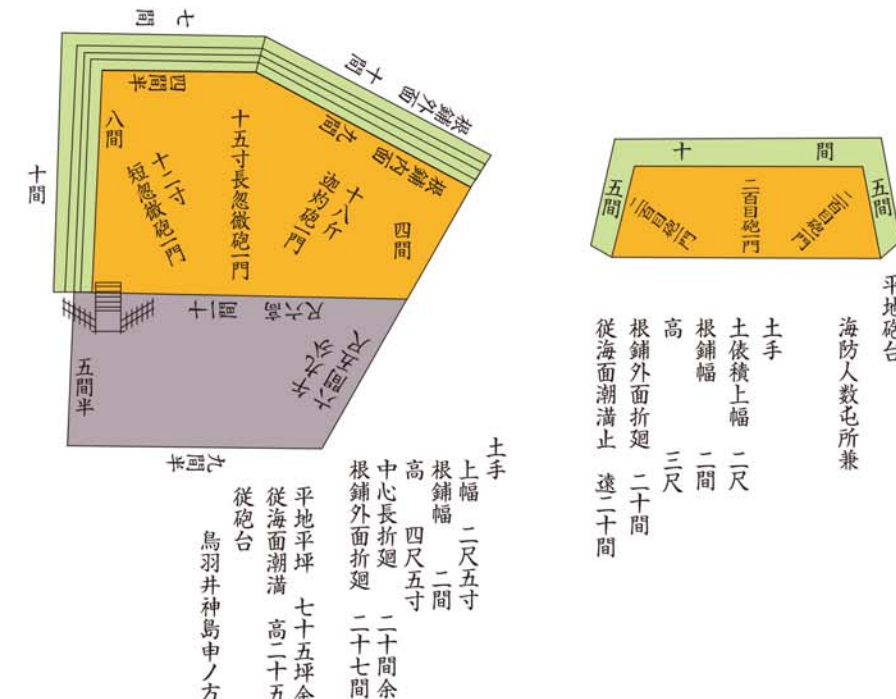
面は、ほぼ直角に設定され、右面は広がっています。この形は、各面に備えられた大砲の種類や地形にそった形だったことでしょう。

平地砲台は、左右対称の台形であることから、変化の少ない海岸線沿いにあったと思われます。二百目砲が3門備えられていましたが、小さく破壊力もあまり期待できるものではありません。「海防人数屯所兼」とされており、砲台の状況に応じて他の田原藩領地の最西端に位置する和地砲台に天保14年備えられていたのは「拾三貫五百目」の大筒で、当時田原藩の砲種のなかでは、もっとも大きな大砲でした。日出砲台の西側に備えられていたのは18ポンドカノンで、共に領地の端に位置しています。領地の端に存在した砲台、大砲は、

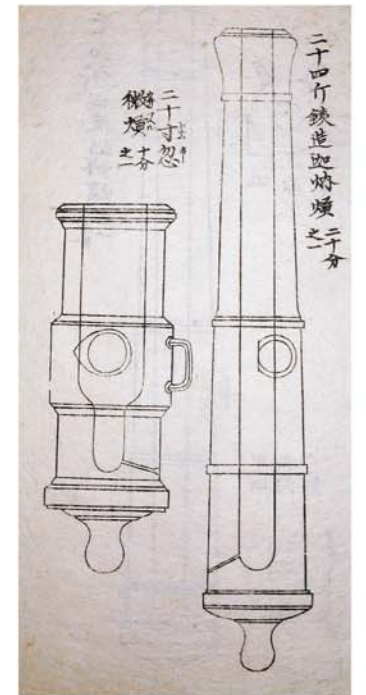
少しでも領地から外国船を遠くに追い払うよう、遠距離射撃のできるよう配置されていたかもしれません。

伊勢神宮警護のため日出砲台と同時期に築造された三重県にある台場のうち、賀崎砲台(津藩。規模95m×140m)、西裏砲台(津藩。規模58m×40m)、一色砲台(久居藩。規模40m×50m)のみが大規模な西洋式の砲台でした。鳥羽藩で設置された34か所の砲台は、岬や台地の先端をならして土塁で囲んだ20m四方(400㎡)以下のちいさなものが多く、日出砲台(高砲台約353㎡、平地砲台約165㎡)とよく似ています。おそらく田原藩で配置された砲台もこのくらいの規模だったでしょう。

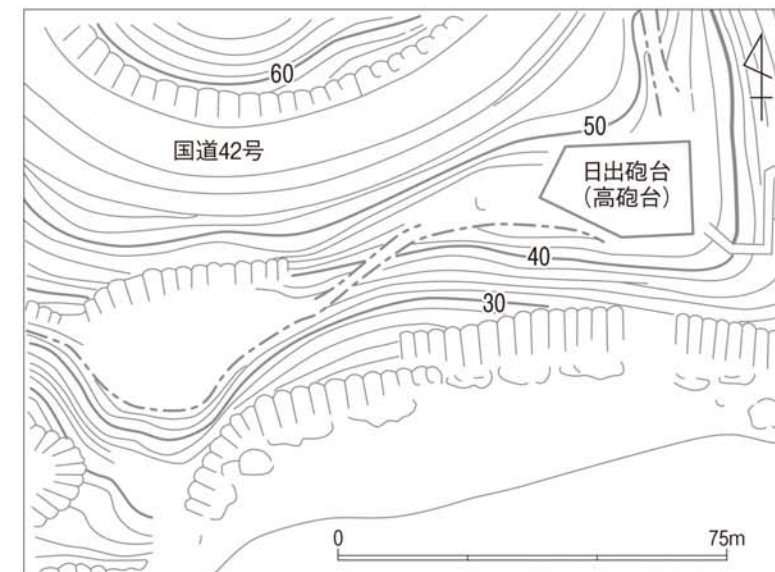
※ドイムはオランダの旧制の長さ。約1cm。
※ポンドは重さの単位。



日出砲台の絵図(原資料:岐阜県歴史資料館)



日出砲台に備えられた洋式砲(左ホウイッスル・右カノン) (『鈴林必携』から転載)



日出砲台(高砲台)の推定位置



日出砲台(高砲台)の現状

海防にかかる資料

西暦	海防関連史
元文4年(1739)	吉田藩、百々村に「海辺仮番所」を建てる。田原藩赤羽根・久美原「遠見番小屋」の設置。田原藩家中への海岸出張手配を決める。ロシア船の接近により陸奥、安房国沿岸に異国船警戒を命ずる。
寛政4年(1792)	ロシアのラクスマン事件 異国船発見の際の処置を諸大名に触れる。諸大名に異国船取扱令を出す。
寛政5年(1793)	田原藩、赤羽根村・谷ノ口村に「遠見鏡之場所」を設置。吉田藩との海岸防備打合せ。
文化4年(1807)	ロシア船打ち払い令を出す。
文政8年(1825)	赤羽根中村に遠見番所の建設。 外国船打ち払い令を出す。
文政11年(1828)	シーボルト事件
天保4年(1833)	『参海雑志』に赤羽根遠見番所、赤羽根砲台の記述。
天保6年(1835)	『田原藩日記』中の「海岸手当之事」を出す。その中に和地大山之頂・大村鼻之頂・富士尾山 ^{のろし} 烽火台の設置が記される。
天保7年(1836)	田原藩が和地・赤羽根・久美原に砲台を築造する。
天保8年(1837)	アメリカ船、モリソン号事件
天保9年(1838)	田原藩主 康直、久美原遠見番所・大筒台場を見分。 田原藩領内海岸防備訓練に甲冑、大筒の使用許可令出る。
天保12年(1841)	田原藩士、村上範致高島秋帆へ砲術修業に向かい、7月に帰藩。 田原藩、「異変出張手配書」を発表。
天保13年(1842)	田原藩、「海岸防禦出張人数割」発表。海岸に領地を持つ藩等に海防強化を布達するとともに、兵力、海岸防備施設の絵図面の提出を求める。「海岸防備出張手当」発表。仁崎村に烽火台を築く。大砲の鋳造を始める。 異国船打払令を改め天保薪水給与令とする。
天保14年(1843)	田原藩、「田原領内海岸防備陣容」を土井利位宛に届出る。同書に、若見村・高松・久美原烽火台、和地・赤羽根・久美原遠見番所、和地・赤羽根・久美原・浦・白谷・野田(馬草)大筒台場の記載あり。 田原藩、波瀬村宮鼻に大筒台場を築く。 赤羽根遠見番所、池尻大筒台場、高松一色のろし台を藩主、三宅康直巡見。 田原藩、高松村のろし台下を中心に和地村、久美原村海岸にわたり、海岸配備の非常訓練を行う。
弘化2年(1845)	田原藩、海岸防備掛を設置。
弘化3年(1846)	田原藩、海岸防禦の指令及び出張人数配りを布達。異国船赤羽根沖に出現。
弘化4年(1847)	江戸湾警備の強化。三宅康直、田原城藤田曲輪にて西洋流、萩野流火術をみる。田原藩、赤羽根比留輪原にて大砲試射を行う。
嘉永2年(1849)	諸大名に異国船防禦の強化を命ずる。
嘉永3年(1850)	田原藩、西洋砲術採用となる。
嘉永6年(1853)	ペリー、浦賀に来航。ロシアのブチャーチン来航。
安政元年(1854)	日米和親条約調印 日英和親条約調印 日露和親条約調印。
安政4年(1857)	田原藩波瀬海岸で西洋式帆船順応丸の建造を始める。
安政5年(1858)	日米・日蘭・日露・日英修好通商条約調印。
文久2年(1862)	馬草砲台ができる。 生麦事件。攘夷決行の勅旨遵奉を決定する。
文久3年(1863)	田原藩村上定平ほか池尻砲台、高松輝力沢の砲台を見る。 田原藩主三宅康保、馬草秋葉山 ^{いづな} 崎砲台を見分。 長州藩、米・仏・蘭船を砲撃。下関砲台をアメリカ・オランダ艦が報復攻撃、破壊される。薩摩藩、イギリス艦隊と交戦。
元治元年(1864)	大垣新田藩、日出に砲台を築く(『渥美町史』)。
慶応3年(1867)	大政奉還
明治2年(1869)	藩籍奉還
明治4年(1871)	鹿藩置県



田原藩の矢部沢大砲鋳造場(田原町五軒丁)



田原藩が使用した弾丸(榴弾)と弾丸の鋳型

田原城ギャラリー



田原城(大正末)

正保城絵図(内閣文庫)

この画像は表示できません

諸国当城之図(浅野文庫)



巴江城の写真(昭和初期)

この画像は表示できません

この画像は表示できません

絵図(愛知大学総合郷土研究所)

城館をめぐる

位置がほぼわかるものを紹介しています。



8 八王子陣屋(八王子町)



14 馬草砲台(野田町)



1 波瀬城(波瀬町)



9 仁崎御殿(仁崎町)



7 安原御殿(豊島町)



5 矢崎御殿(吉胡町)



2 中山陣屋(中山町)



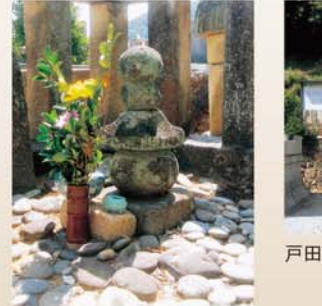
4 古田村古屋敷周辺から福江湊を見る(古田町)



12 井河津村古城(伊川津町)



18 亀山村古城(亀山町)



一色七郎墓(大久保町・長興寺)



戸田氏墓所(大久保町・長興寺)



- 数字…中世城館 (P4 参照)
- 数字…陣屋と御殿 (P21 ◇)
- 数字…海防施設 (P25 ◇)
- 数字…戦争遺跡 (P20 ◇)



22 西光寺本多広孝陣(西神戸町)



7 青津村城(堀池館)の碑(神戸町)



長仙寺家康本陣(六連町)



15 烏丸資任の墓(雲山寺)(保美町)



13 保美上城(保美町)



15 保美下城周辺(保美町)



20 馬場右京進居館(小塩津町)



9 一色七郎屋敷(大草町)



10 糠塚長者屋敷(大草町)



7 堀池館(神戸町)



13 久美原砲台から(六連町)

参考図書



当時の時代・城主を調べたいとき

図書名	発行者	発行年
『渥美郡史』	愛知県渥美郡役所	1923年
『赤羽根町史』	赤羽根町	1968年
『田原町史』上巻	田原町教育委員会	1971年
『田原町史』中巻	田原町教育委員会	1975年
『渥美町史』資料編上・下巻	渥美町	1985年
『藩史大辞典』第3巻・第4巻中部編	雄山閣出版	1989年
『田原藩日記』1～10巻	田原町	1987年～1997年
『渥美町史』歴史編上巻	渥美町	1991年
『渥美町のむかし探訪』	山内藤雄著 愛知渥美町農業協同組合	1992年
『蔵王―田原区文化誌―』1～5	田原区	1994年～1998年
「その後の戸田一族」『田原の文化』第20号	關目作司著 田原町教育委員会	1994年
『渥美町の民俗探訪』	清田治著 愛知渥美町農業協同組合	2001年
『愛知県史』資料編9 中世2	愛知県	2005年

城館等の遺構を詳しく調べたいとき

図書名	発行者	発行年
『日本城郭大系』9	新人物往来社	1979年
『図説 中世城郭事典』二	村田修三編 新人物往来社	1979年
『定本 東三河の城』	高橋延年監修 郷土出版社	1990年
『田原城跡確認調査報告書』	田原町教育委員会	1990年
『田原城跡(I)―藤田曲輪の発掘調査―』	田原町教育委員会	1995年
『愛城研報告』 「渥美郡の中世城館」・「渥美郡の城館関連遺跡について」・「渥美半島の沿岸防備施設(概報)」ほか多数	愛知中世城郭研究会	1996年～
『愛知県中世城館跡調査報告』3東三河地区	愛知県教育委員会	1997年
『惣作古窯跡(II)・田原城跡(II)・桜畑古窯跡群』	田原町教育委員会	2003年
『愛知の山城ベスト50を歩く』	愛知中世城郭研究会編 サンライズ出版	2010年

城館等の由来を調べたいとき

図書名	発行者	発行年
『三河志』上、下巻	歴史図書社	1969年
『愛知県地名集覧』	日本地名学研究所	1969年
『参河国名所図絵』上・中・下巻(田原市は中巻)	愛知県郷土資料刊行会	1972年・1981年
『田原近郷聞書』『豊橋市史』第5巻	豊橋市	1974年
『三河国二葉松』『三河国歴史地理資料』	歴史図書社	1980年
『三河国古今城壘地理誌』『三河国歴史地理資料』	歴史図書社	1980年

目を通していただきたいもの、基本的な図書を紹介します。その他、城に関する書籍はたくさんありますが、手に入りにくいものもありますので、田原市教育委員会文化財課・田原市博物館にお問い合わせください。

田原の文化財ガイドⅢ

渥美半島の城館

【編集・発行】

田原市教育委員会 愛知県田原市田原町南番場30番地1 ☎0531-27-8604

平成24年3月発行

平成28年12月改訂

令和5年3月発行 デジタル版

一
二
三
九
南
之
方
古
居
之
田
原
横
之
間
深
之
足
能
中
心
之
河
國
田
原
城
去
原
被
換
は
作
身
白
朱
引
之
通
是
今
前
如
元
依
後
は
度
奉
願
好
儀
以
上